

今、先生方へ伝えたいこと

～東部通信より～

局長 久岡 賀代子

子どもの目の輝きのために

未曾有の大震災により、尊い命、家屋、産業等、多くのものが失われました。しかしながら、この国難・危機の中で、日本の子どもたちの思いやりの心や困難に立ち向かう諦めない心の強さを再認識しました。まさに、これは人としての「生きる力」の基本です。「生きる力」をより一層育むという基本理念をふまえた現行学習指導要領のもと、「知・徳・体」のバランスを重視した教育が推進されています。地域に生きる子どもたちの主体的な「生きる力」を育むために、幼保小中高の校種間連携を中心とし、保護者・地域とともに子どもの実態や各教育課題に応じた取組がますます充実していくことを期待しています。



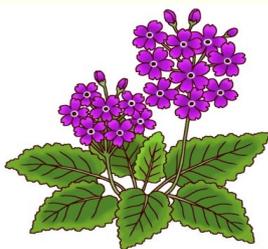
教育を取り巻く環境は非常に厳しい昨今ですが、いつの世でも子どもの目は輝いています。子どもたちが学校を好きになる第一条件として、教師との出会いがあります。子どもの目の輝きのために、教師は「人を育てるプロであるという自覚」や「教育の使命」を忘れてはいけません。私たちには時代の流れを見据えながら、責任をもって子ども一人一人の可能性を伸ばすことが求められています。「学びの精神」をもって教師としての感覚や教育技術等を身につけるために研鑽し、気持ちを新たにそれぞれの教育実践に取り組んでいきたいものです。

授業を楽しんでいますか？

子どもの学ぶ心、学ぼうとする心は、楽しい授業において生まれ、教師の子どもの学びを捉える心は、授業を楽しむことにおいて磨かれます。そのためには、映画やドラマの監督のように「このことを、こんな場面で、こんな方法で」と、企画・構成し、演出していくことです。そして、教師が「今日はこれで勝負をする」というような授業を行うことに無上の喜びをもつことです。

実際の授業では、課題を追究するという営みが展開されます。

子ども一人一人の思いや考え、つぶやきを見取りながら、子どもと一緒に授業を創っていきます。この楽しみは教師にのみ与えられているものであり、教師が授業を楽しむことで子どもも授業を楽しみと感ずるのです。



学校は、子どもたちの学び続ける意欲を育成しなければいけません。子どもが学習から離れていく姿を見かけることがあるならば、これは子どもの責任ではなく、まさに教師の責任なのです。教師は『子どもの学び』を保障し、授業で勝負することが求められています。そのためには、日々の授業を教師自身が楽しむ取組が大切です。

教師の成長につながる話合い

ある授業研究会の終盤の話合いです。

「小五の子どもたちがすごく育っているのは、担任の先生がしっかりと子どもの課題をとらえて瞬時に動かれているからだということが分かった。それに今日の協議は皆さんかつこいいけど、私はどうもうまくできなくて自信がもてない。」と若い教員の発言がありました。

すると、養護教諭から、「それは、自分も含めて周りの先生方の関わりも必要なのかな。自分はだめだなと思っても、自分を受け止めてくれている人がいれば頑張れるよね。……学級も一緒に、互いの信頼関係があれば、子どもたちも意見が出せる。」との発言がありました。この学校の教師たちには、本音をぶつけ合って問題点を指摘するだけでなく、その背後には「子どもたちのために少しでもよりよい授業ができるようになりたい。」という志をもった教員同士の連帯感があります。

これからも学校では様々な話合いが行われます。議論で共有し、教師が鍛え合うことができる会は、教師の成長につながります。

子どもを見る確かな目をもつことが教師力の始まり

斎藤喜博の著書には、教師力について以下のように示されています。

「授業を核として、子どもの精神を豊かにし、困難を恐れず、充足感をもち、自己と他者とを大事にすることや、真の感動を学ばせることを願う。」
「教師は、学級内相互の心の交流をベースに、授業を組織化する。」
「教師は、人のこころを読み取る力、即応力をもち、独創性、明確さ、力強さを授業に賦与することのできる芸術家である必要がある。」



教師の醍醐味は、「よりよい授業」を実践し、子どもたちに社会で生きる力を与えることができる教師力を身に付けることです。

学校訪問をしていて、多くの学校で授業改善に真剣に取り組まれていると感じます。ただ、よりよい授業を具体的に考えていくには、まず子どもを見る確かな目をもつことが必要だということも感じます。子どもに力を付けるために、授業を徹底的に追究したいという思いをもち、同僚性の中で磨き合うことで専門性を高めていくことができます。授業を核にして、子どもたちの見取りを同僚と話し合い、人間的なかわりを深めていくことが、教師力を高めていくことにつながるのではないのでしょうか。

めざすことを諦めない

「これ以上ないほど疲れているが、ヒマラヤの素晴らしい景色が眼下に見えます。

頑張って頑張ってたどり着きました。応援ありがとうございます。」

最高峰に挑まれた三浦雄一郎氏の言葉です。

人は辛くても頑張って諦めないで前に進めば、夢は叶うということを80歳の身体で教えてくださいました。

「諦めない」原動力は、大きな夢。そして高い志。

自分が諦めない限り、自分が夢や志を持ち続ける限り、私たちにも可能性があるのです。きっと三浦氏は、自分の可能性を信じて山頂をめざされたのでしょう。「人に勝つものは力有り。自らに勝つものは強し。」という老子の言葉があります。愚痴や不満を言ったり、マイナスで物事を考えたりしている人にはできないことです。

本当の強者は、自分に勝つ人です。三浦氏の尊い姿から、私たちが学ぶことは、自分本来の在り方を忘れず貫く強さと、それを支えてくれる人の存在です。

人が育つのは陶冶です。私たち大人が子どもたちに、このような人生を歩み出す夢や志を育ませることが、これからの鳥取、日本を強くする源につながるのではないのでしょうか。

たった一人しかない自分を
たった一度しかない一生を
ほんとうに生かさなかつたら
人間 生まれてきたかいが
ないじゃないか

山本有三 作 「路傍の石」